

# 「平和国塊」の二〇〇年人生

「初の「三世代平等社会」を達成」

堀内正範 元『知恵蔵』編集長

(筆名 堀 亜起良 東洋哲学者)

## その第五 新世紀二〇年に渋滞した高齢化

### I 高齢化対策が長期に片肺飛行

高齢者対策は成熟、社会対策が半熟

ああ惜しいかな新世紀二〇年

年寄り「被扶養者」という固定観念

### II 事業を羅列したまま世紀を越える

高齢化対策の「基本法」と「大綱」の二〇年

「大綱」の改定を知らない高齢者

歴代担当大臣の無責任連鎖

### III 広がった亀裂と格差

「九割中流」から「下流老人」へ酸欠流下

現代の「健陀多（カンダタ）」の話

「非を飾る」若者たちと「関わらない」安保世代

IT化と「デジタル・デバイド」

## I 高齡化対策が長期に片肺飛行

### 高齡者対策は成熟、社会対策が半熟

新しい世紀を迎えたとき、平和団塊のみなさんは、五〇歳から五四歳の働きざかりのころでした。初詣ではみなさんそれぞれに、大きめの新たな目標の成就を祈ったことでしょう。あれから四半世紀近くが過ぎ去って、何を得て何を失ったかがそれぞれに明らかになりつつあるのではないのでしょうか。

際立って見られる姿としては、若者化、女性化、IT化、バカ化（愛痴化）が進んで、世相として様変わりしたことでしょうか。違和感を持つ方もいるでしょうが、バカ化（愛痴化）も世の中を活性化させる欠かせない要素となっています。

ここでの課題である「高齡化」については、医療・介護・福祉、年金、高齡就業といった「高齡者対策」は進みましたが、モノ・サービス・居場所づくり、移動、住居、生涯学習といった「高齡社会対策」はどれもが渋滞していて、「高齡化対策」の全体としては片肺飛行のような状態がつづいているのです。

進んでほしい「高齢社会対策」の事業は、内閣府で五年ごとに検討され見直されていますが、積み残されたままで実現されておりません。未熟かせいぜい半熟といったところ。理由はのちに述べますが、その延滞による被害者は高齢者なのですが、渋滞の責任は政治の側にあります。

現役政治家は予算の社会保障費の対象である高齢弱者・扶養者については理解していても、年々増えつづけている健全な高齢者の実人生はわからないのです。これま  
でになかったことですから、直面している者にしかわからないのです。

事業渋滞の理由は明らかに政治の側にあります。新世紀に「世代交代」によって新しい時代を起こそうとする若者たちが、政界を覆いつくすトルネード（竜巻）を巻き起こし、その勢いに乗って全国から呼集された国会議員が、これはご記憶にあるように、「小泉チルドレン」や「小沢ガールズ」や二世・三世議員の登場として新世紀の潮流を作り出しました。

そのために高齢者中心の「世代交流」による静かな潮流である「高齢化」は底流に追いやられて、「社会の高齢化」は渋滞しているのです。

「世代交流」を通じた「社会の高齢化」は、国際的な新世紀の潮流なのです。国連は早くから新世紀の潮流を「高齢化」と見通して、一九九九年を「国際高齢者年」

(International Year of Older Persons) と設定し、一〇月一日を「国際高齢者デ

」と定めて、各国の高齢者が自立して「すべての世代のための社会をめざして」(towards a society for all ages)の活動に立ち上がるよう呼びかけたのでした。

一九九九年、世界最速で「高齢化」がすすんでいたわが国は、時の総務庁をフォーカルポイント(窓口機関)として対応して、全国展開をしています。全国の自治体の関連事業は一〇八三件に及び、民間団体を結集した高連協(高齢者年NGO連絡協議会、いま高齢社会NGO連携協議会)は、九月一五日に「高齢者憲章」を発表し、今にいたる活動の指針としています。

地方も含めて福祉をテーマとして「世代交流」により広がりを見せた「高齢化社会」への関心と活動は、まことに惜しいことに、新世紀に入って「世代交代」によって政界を襲った横流の前に波頭すら見えなくなりましたが、底流しつづけているのです。

#### \*若年化・女性化・愛痴化の二〇年

世紀末の「国際高齢者年」の活動を担っていたのは福祉関連の団体・企業の六〇歳代(還暦期)のみなさんでした。いま八〇歳代(米寿期)になり、なおお元気で「世代交流」の立場で、この国の「高齢化社会」のありようをみずからの人生と重ねて示しておられます。「二〇〇年人生」時代を切り開く八〇歳。円熟期の真っ最中といったところです。

当時五〇歳代の働き手で「高齢化」にも「高齢者年」にもやや距離があった約一〇〇〇万人のみなさんが、いまや七〇歳代の「古希期」にいたのが現状です。そしてだれもがそれぞれに現役のときに鍛え上げた知識や技術を保持しながら社会参加の機会をえずに「毎日が日曜日」とヤユされながら暮らしているのです。まことに惜しいことなのです。

「世代交代」による二〇年間の「若年化・女性化・IT化、バカ化（愛痴化）時代」がつづいて世の中は様変わりしましたが、それは時代の変化を映し出すテレビ画面の変化によく表れています。

情報番組から高齢解説者が消えて、三分間の熟視に耐えられる美人系アナの競演になっていきます。実力を伴わずに登用されていますから、「一知半解」まるだしです。あとはアドリブで笑いがとれるお笑い芸人でしょうか。番組内容は食べものと旅ものとクイズものと歌とお笑い番組で大半が占められてしまい、質の高い円熟した生活感を共有できるような番組はつくられづらくなっているようです。

「バカ化（愛痴化）」が進んでバカ本がバカ売れする時代ですから、

「違和感がある知性派出演者は外されたり退いたりしていなくなつたよね」

というのは、ニュースと天気予報しか見ないという高齢視聴者の声です。

若い司会者が、生活感のまるで感じられない着おろしのスーツに胸にハンケチ、ハ

ンサム男性代表といった表情でコロナ重症者の解説をしています。

「報道者かお前は、だれに語りかけているんだ」

お風呂あがりのような女性アナウンサーが、髪を数本額に垂らして、スプライト系の美女めかしてサン・スーチー女史の現状を伝えます。

「美しくないよお前さんは」

エンターテイメントの鍛えあげの欠けたお笑い芸人が、品のない思いつきのネタでバカ笑いを誘う。

「芸人かねお前さんは」

消したテレビ画面にむかって吐露する高齢者の悪口には一理あるように感じます。

### ああ惜いかな新世紀二〇年

政界の「世代交代」は新世紀とともに弾けるように表面化しました。政界あげてのトルネード（竜巻）。トルネードというのはアメリカ大リーグを沸かせた野茂英雄投手の投法からの流行語です。「世代交代」によって新世紀に新しい社会をつくろうと声高に叫んで登場した人びとがいまや政界の主流になっています。しかしどう党派を組み直しても厚い無党派層の存在を突き崩せない状態がつづいています。少数支持による政権では「国難」を処理することができず、コロナ禍という「国難」がそれを明かし

ているのです。実態のある「一億総活躍」の対策構想を掲げることができないのです。

世紀はじめに垣間見たはずの新たな社会を求めて、みんなで赤信号を渡って二〇年、いまや政界の先方には求めたはずの日本社会の姿は見えず（多岐亡羊といえます）、行き止まりが見えているのです。それに気づくことができず、前方の壁にむかってなお「世代交代」を叫んでいるのです。現政府はコロナ禍に対する全体構想が掲げられず、全国での感染リバウンドを止める手立てがないのです。

とくに安倍政権の七年間では若者の「成長力」と女性の「多様性」による「経済成長」がはかられました。それにプラスして長寿国の高齢者の保っている「成熟力＋円熟力」による新たな「経済伸長」がありえたのですが、それは想定外のことでしたから、政策としようがなかったのでしょうか。

新世紀のこの期間に、世界一の長寿先進国であるわが国で実現しなかったのですから、「高齢化社会」がどんなモノとサービスとしくみをもつ社会であるかは知りようがないのです。優れた知識・技術・知見を有したまま、この国の将来を憂慮しつつ亡くなっていた先人の姿が偲ばれます。

ああ惜いかな新世紀二〇年、なのです。

といって欧米先進諸国（高齢化途上国）から先例をつくれなかったことでとやかくいわれることでもありません。が、最速で「高齢化」が進んでいるわが国が先例をこ

しらえる立場にあったことはたしかなのです。

新世紀二〇年、「高齢化社会」に対する「世代交流」による国民的議論がつづけられていけば、そこから導き出された「成熟力＋円熟力」による新たなモノやサービスやしくみが発想され、内需としての「経済伸長」がもたらされていたでしょう。

「一〇〇年安心年金」の成立に苦勞した厚労省の官僚や坂口力厚労大臣がいまなお安堵できているような実質を持ちつづける年金でありえたでしょう。二〇年にして生涯年金の不足額二〇〇〇万円がささやかれるようなことにはならなかったはずなのです。

高齢者は、みずからの生活感性にふさわしい良質な国産・地産品にかこまれて過ごし、先人に感謝し、後人に敬愛されて、生き生きとエイジング期を過ごすことができていたはずでした。増えつづける高齢者のみなさんは、みずからの生活感性にふさわしい居場所に集い、丈夫で長持ちする良質な国産・地産品に取りかこまれて過ごし、後人に敬愛されて、生き生きとエイジング期を過ごしているはずでした。

整理して繰り返しますが、一九七九年にエズラ・ヴォーゲルに「ジャパン・アズ・ナンバーワン」(著書の原題は Japan as Number One: Lessons for America)と評価されて国際的に関心をもたれた日本経済が、新世紀後の道を選び間違えてきたのです。「高齢社会対策」が西欧と同じレベルにとどまっていることは、安心するどころか遅れていると理解すべきなのです。政治の側が「高齢化」の本筋を理解できずに今に至



る道を選択し、それが「高齢社会対策」の延滞を引き起こし、増えつづけてきた高齢者の潜在力を活用することでありえたはずの経済社会の不在を招いてきたのです。

ああ哀しいかな、失われる二〇年！

#### \* 高齢者社会を高齡化社会に

新世紀になって二〇歳の年を重ねた高齢者のみなさんのまわりの社会変化といえ、自分を含めた「高齢者社会」にはなりましたが「高齡化社会」とはいえないということでしょう。これは暮らしの実感として顕著です。

年々増えつづけて四人にひとりに達した高齢者。そのうちみずからの生活感性にふさわしい新たなモノ・サービス・しくみを創り出す活動や事業にたずさわっている「現役長生型」の人の姿もありますが、いまある生活環境に身を細くして加わって過ごしている「引退余生型」の人の姿が増えたことは顕著です。これでは先導役として「高齡化」の新社会の創出には向かわないでしょう。

「高齢者社会」を「高齡化社会」にするにはどうすればいいのでしょうか。

本稿が二〇年をかけてその検証に用いてきた二回転半ひねりの逆転の発想について明かしておきたいと思えます。ここまでお付き合いいただいたみなさんなら、「一〇〇年人生」時代という歴史的事実への本稿の対応はおよそおわかりのことと思えます。

まずその一は、経済成長は「若者と女性」の成長力によるもので「高齢者」は無縁であるという「固定観念」を転換すること。今世紀の潮流である「高齢化」が経済伸長をもたらすということです。高齢者が成熟・円熟期の知識・技術を活かして新たなモノやサービスや居場所や暮らし方を創出すること、技術的イノベーションを利用することで経済を持続的に伸長・拡大できるということ。

その二は、西欧先進諸国からの良いところ取りの後追いではなく、独自の特徴を近代の歴史や現在の社会動向（世相）や伝来の風習などを通じて抽出して事業活動につなげること。独自の特徴をもち史上初であるものについては、それが先進諸国より先行しているものであることを確信すること。

その上で、モノならば青少年（成長期）対応、中年（成熟期）対応、高年（円熟期）対応の一品三種（女性対応があれば一品四種）の製品多様化を社員・社友の合議によって成立させること。これが二回転半ひねりの逆転の発想で、経済不況の迷路からの脱出口発見ということになるのです。

どうでしょう。「経済成長」という表現だけでなく「経済伸長」を合わせ呼ぶことにしては。第三の現役「高年世代」の事業活動から産まれる経済的成果「経済伸長」があるのですから。

「高齢化対策」のうち高齢者個人にかかわる「高齢者対策（ケア）」のほうは、とく

に一九六一年にスタートした国民皆保険の充実、二〇〇〇年にスタートした介護保険の充実、医療面での各診療科の施設・医師の充実は身近かに経験してきましたし、最近では地域ごとに「地域包括支援センター」が設けられて、住民が高齢期を安心して暮らせる体制が形づくられてきています。

「高齢社会対策」は、就労の継続や高齢者起業による高齢社会にふさわしいモノやサービスづくり、居場所・通い場所の設置、生涯学習のしくみ、「世代交代」ではなく「世代交流」、暮らしや介護やエンディングを含む地域での「支え合い（互助）」、ユニバーサル・デザインの行き届いた住居や安全な移動・・・そのほかの課題も積み残しになっているのです。

「生涯現役」が叫ばれて、高齢者の就業も二五％まで伸びているのですし、右の「高齢社会大綱」に示される課題だけではなく、自治体（協議体）や生活圏での要請に応える手作りの事業が見込まれて、内需を起こしていく素地は見えています。あとは三六〇〇万人の高齢者の意識改革と参加意欲の発露ということになるでしょう。「少子高齢化」の進行で経済は萎縮すると決めてしまうのではなく、「社会の高齢化」事業によって「労働力減少」ではなく「労働力変容」を成し遂げることができて持続可能な「高齢化経済」の伸長が具現化されることになるのです。

みなさんが長年かけて積み上げてきた知識と培ってきた技術とが活かされて、熟年

者層の生活感性にふさわしい新しいモノが製品となり、提供されて商品となり、家庭にはいつて生活用品として高齢期の暮らしを豊かにしていくこととなります。

二〇年前に新世紀を迎えるにあたって、「長寿をすべての国民が喜びの中で迎え、高齢者が安心して暮らすことのできる社会」（前文）をめざすとして、「高齢社会対策基本法」（村山富市内閣）を制定したのが一九九五年一月でした。そして次年の一九九六年七月には、なすべき事業を掲げた中期目標として「高齢社会対策大綱」（橋本龍太郎内閣）を閣議決定しています。

その後「大綱」は五年ごとに見直されており、「小泉純一郎内閣」（二〇〇一年一月）と「野田佳彦内閣」（二〇一二年九月）と「安倍晋三内閣」（二〇一八年二月）で改定されています。

制定の実務に当たったのは当時の時代感覚に優れた官僚と学者でしたし、一九九九年の「国際高齢者年」のフォーカルポイント（窓口機関）として全国展開したのは当時の総務庁高齢社会対策室でした。「長寿を喜びのなかで迎える高齢社会」の実現への予感を官民ともに共有していたのでした。底流しているのは、戦後の企業戦士として働いて時代をつくってきた功労者を慰労し敬意をもって生涯にわたって優遇しようとする官僚や学者や関係する人びとの「善意」の集積であったということです。

ここで見落としていけないことは、実行者として高齢者が参加する事業ではなく、

政治の側が国民のためになすべき対策だったことです。それゆえに、国のなすべき事業として実施は政治の側にまかされており、まだ少数であった高齢者に参加を求めなかったことが「大綱」に取り上げられた諸事業に予算が立たず進んでこなかったのです。時を経て「高齢化対策」は「片肺飛行」となり「失われた二〇年」となり、なすべき社会対策がなされてこなかった一方で「社会保障」財政だけは雪だるまのように赤字を拡大しつづけてきたのです。

長期的片肺飛行と財政の巨大な雪だるま。

「高齢社会対策」が手つかずになつた理由は、「大綱」の検討時期を単純に五年ごとにしてしまったことにあります。高齢者増という実態に即した「高齢化率」（六五歳以上の高齢者の比率）を基準にすべきだったところでしょう。

「高齢化率」が五%増の刻みの時期あるいは七%、一四%、二一%という国際基準ごとに「大綱」の見直しをおこなえば、その間に増えた高齢者はわがこととして意識改革をし、社会参加をすることができます。政・官・産・学・民の各界いずれにおいても高齢世代の活動を延伸させて持続可能な経済社会を保持する。こうして「社会構造の高齢化」を国際基準に合わせて実現することで「日本高齢社会」の経緯を公開しながら創出することができたでしょう。これは高齢化途上国の今後にも影響する重要な観点です。

この「高齢社会対策」の延滞が年々増えつづける高齢者の「将来への不安」を醸成し、不安への対応が家計資産を一四〇〇兆円にまで積み上げてきた一因なのです。将来に不安がなく、将来にむけて参加すべき事業が明解であれば、元気な高齢者はだれもが積極的に社会参加し、保持する「健康・知識・技術・人脈・資産」を活かして、社会の活性化に貢献できていたはずなのです。「過剰貯蓄」なぞ生じることともなかつたでしょう。

繰り返しますが、「高齢社会対策」の延滞が生じた要因と責任は、明らかに政治の側にあるのです。しかし主因と結果とは何事もせず過ごしてきてしまった国民の側にあります。そしてその延滞により露呈してくるすべてのツケを引き受けるのは、政治家ではなく高齢者自身であり次の時代の高齢者なのです。

本来なら二〇二〇年は、「基本法」二五年の節目に当たる年ですから、政府筋から経緯を振り返り、成果を確かめ、将来を見据え直す行事があってもいいところでしたが、その気配は見られませんでした。

底流している「高齢化」の姿をしっかりと見据えて、高度成長を成し遂げたあとも元気な高齢者層に対して参加を要請し実行できていけば、今ごろ「一億総活躍」をい出しながら三六〇〇万人の高齢者を軽視するというちぐはぐな政策はとらなかつたはずなのです。

## 年寄り「被扶養者」という固定観念

一〇〇歳の双子姉妹のきんさんぎんさん（きんさんは三世紀を生きた）が元気だった一九九〇年代のころ。高齢化への関心が拡がる中で、増えつづける元気な高齢者に呼びかけて、「大綱」で提案しているさまざまな課題、高齢者意識の醸成をはじめ就労、健康づくり、社会参加、学習活動、生活環境といった課題を「高齢社会グランドデザイン」として提案して、実現にむかうことがどうしてできなかったのでしょうか。

課題の実現に努める世紀はじめ時期に、当時の首相は「所信表明演説」（二〇〇一年五月七日）で国民にむかって何と行ったでしょうか。

将来の高齢者増による「ケア」の負担増を取り上げて、

「給付は厚く、負担は軽くというわけにはいきません」

といい切ったのです。

五〇歳代のみなさんは、どう理解したのでしょう。

新世紀のはじめに、この「所信表明演説」をしたのは、時の小泉純一郎首相です。

小泉首相は二〇〇一年一二月には橋本内閣以来五年ぶりの「大綱」改定を閣議決定しているのですが、内容はほとんど手つかずに。

このときから「長寿をすべての国民が喜びの中で迎え、高齢者が安心して暮らすこ

とのできる社会の形成」（「高齢社会対策基本法」前文）へむかうはずであった新たな「高齢化」活動が萎えてしまったといっているのです。この首相発言の責任は歴史的に重いのです。

発言の内容が間違っているわけではありません。政界の「世代交代」の立場に寄り添った発言だったことを確かめているのです。

高齢者は「社会の被扶養者」という固定観念が長く財政上の軸をなしており、首相の発言が「高齢者対策（ケア）」であり「高齢社会対策（社会参加）」でなかったことに問題があるのです。予算折衝に当たった焦眉の急が、高齢弱者である人びとへの「医療・介護・福祉」と「年金」だったことは確かでしたが、それとともに、

「元気な高齢者のみなさんは新しい社会の支え手になってほしい」

と呼びかけて、将来の財政難を説きつつも増えつづける元気な高齢者層に「自助・互助」意識を醸成するとともに、高齢者みずから暮らしやすい社会の創出を官民の協働で進めるよう訴えるのが、時宜を得た政治リーダーの構想力だったのでなかったでしょうか。「世代交流」の立場です。一九九九年の「国際高齢者年」のテーマは「すべての世代のための社会をめざして」（*towards a society for all ages*）だったのですから。

新世紀のはじめに、歴代首相のなかでも発想力の優れた小泉首相の「所信表明演説」



を聞いて、天を仰いで慨嘆した官僚や学者や高齢社会活動家やジャーナリストや高齢者がいたのです。

これは記したくないのですが、「年老いて周囲の負担がかさむと考える心優しい高齢者が、善意で死に急いでくれて、日本高齢社会は思いのほかスムーズに形成できました」ということにならざるをえないのではないかとさえ思われました。

小泉さんは周囲の「世代交代」の大合唱に押されて、優れたしごとをしてきた高齢政治家まで年齢で区切って、政治の表舞台から追い払ってしまったのでした。

\*みんなで渡った霞が関の赤信号

今世紀のはじめに、政界の「世代交代」の突風にあおられながら、二〇〇五年の「郵政選挙」では八三人（八三会）の小泉チルドレンが当選しました。このチルドレンを誘導して、年齢で高齢政治家を排除して、新しい世代の社会をつくろうと「霞が関の赤信号」を急ぎ渡ったのは、かつて優れた厚生大臣と評された小泉首相でした。

一九九九年の「国際高齢者年」のテーマは「すべての世代のための社会をめざして」でしたから、世紀初めのわが国の「高齢社会対策」について、国際的に要注意信号が出ていたのです。「高齢社会対策」への検討を怠ったまま、一方の「高齢者対策」の年度予算を通過させて事足りりとしたのです。

「医療・介護・福祉・年金」といった施策では国際的水準での評価を得ているし、平均寿命や健康寿命では世界のトップレベルの数値を示しています。これらの「高齢者対策」については率直に誇っていいでしょう。しかしモノやしくみといった「高齢社会対策」での失政の連鎖は率直に認めざるをえないでしょう。

政治家にはなくとも官僚と学者にそういう認識があればこそ「高齢社会対策大綱」の改定はできたのです。二〇〇一年一二月、小泉内閣は五年ぶりの「高齢社会対策大綱」の改定を閣議決定しておりますが、その中に「健康面でも経済面でも恵まれないという旧来の画一的な高齢者像にとられることなく、施策の展開を図るものとす」という記述があり、新たな高齢者像を示して新たな対策は埋め込まれているのです。官僚と学者が時代を底流している「高齢化」に理解がなかったわけではなく、政治の側の想像力が働かなかったのです。

小泉さんはいま「原発の全面禁止」を訴えておられますが、この国の「高齢社会対策」に延滞をもたらした責任を認めて、政治リーダーを代表して「君子豹変」の姿を示してほしいものです。

## Ⅱ 事業を羅列したまま世紀を越える

### 高齢社会対策の「基本法」と「大綱」の二〇年

「九割中流」の社会を成し遂げた人びとをわずか三〇年で「下流老人」におとしめてしまった酸欠流下の経緯を明らかにし、その責任の所在を突き止めて、しくみの変更をしなければ問題解決にはならないのです。

だからといって一九九五年一月に「高齢社会対策基本法」を制定した村山富市氏を責めるわけにはいきません。いまでもお元気に過ごしておられる「眉雪」の美しい村山さんには、まずは制定時の志を思い起こしていただければそれでいい。

責任はそれ以後の政治リーダーにあるのです。

翌一九九六年七月には、橋本龍太郎内閣によってその実現への指針として「高齢社会対策大綱」が閣議決定されています。橋本さんの活動にはその後も実現への志を見たのですが、まことに惜しいことにはその活動の後継者を残さないで世を去ってしまいました。

「基本法」も「大綱」も、みなさんのお仲間である優れた構想力のある国家官僚や学者の創意によって起草されたものでしたが、策定した者として新世紀にみずから高齢者として「喜びの中で安心して暮らす」姿とは異なっているに違いありません。

いかがですか、高齢者になって、達成にむかっていないと感じているのではないですか。

「高齢社会対策大綱」の策定の目的にはこうあります。

「二一世紀初頭の本格的な高齢社会を目前に控え、国民の一人一人が長生きして良かったと実感できる、心の通い合う連帯の精神に満ちた豊かで活力のある社会を早急に築き上げていくためには、経済社会のシステムがこれにふさわしいものとなるよう不断に見直し、個人の自立や家庭の役割を支援し、国民の活力を維持・増進するとともに、自助、共助及び公助の適切な組合せにより安心できる暮らしを確保するなど、経済社会の健全な発展と国民生活の安定向上を図る必要がある」

と。これでワンセンテンスです。さすが優れた官僚の策定文だと感心し辟易しながら思うのは、このワンセンテンスの中に経緯と目標のすべてを詰め込んでいるからです。しかし実際の推進者はさまざま課題解決の役割を付託されて多忙な政治家です。この「大綱」の策定にかんする文章を一読し再読して、「官僚の文章はごちゃごちゃしていてよくわからん」といつて投げ出してしまったのではないか。最後まで読まなかった人もいたかもしれません。

いずれにせよ、ひとしごと成し遂げて、成熟・円熟期にある高齢者に、もう一步、「高齢社会」達成への達成を要請した政治リーダーを知りません。「大綱」の事業は羅列されたまま世紀を越えて五年後の検討会に引き継がれることになりました。

\* 事業延滞の責任者がし

事業延滞の責任者がしをつづけましょう。

「基本法」から制定二〇年目にあたる二〇一五年九月に、安倍首相は唐突に「一億総活躍」をいい出しました。そしてご存じのように、一〇月の内閣改造で「加藤勝信・一億総活躍担当大臣」を登場させました。オールジャパンをいうのですから、当然のこと、知識も技術も資産も保持している高齢者層への参加を呼びかけるものと発言を待ちましたが、そういう趣旨の後追い発言はありませんでした。安倍首相の発言は「基本法」の二〇年の延滞を意識しての発言ではなかったようです。

任命を受けた加藤勝信担当大臣は、大急ぎで各省の担当官僚を集めて、霞が関からの視野にはいる人材によって「一億総活躍国民会議」を発足させました。その急場しのぎの手法にぬかりはないのですが、ただし国民の四人にひとり到達した高齢者（六五歳以上、約三五〇〇万人）が持つ潜在力の活用を要請できる広い視野で、「国民会議」をリードできる高齢有識者を探した形跡がありません。

「国民会議」のメンバーに、本稿にも登場していただいた優れた有識者が代表として参加していないのがその証です。高齢世代の人の声が反映されなくては、オールジャパン・オールエイジズの議論にはならないでしょう。

「下流老人」現象は、高齢者が四人にひとりになる時期までの高齢社会対策を着々と講じていれば露呈しなくて済んだプロセスなのです。そうできなかったのは他の道を

選んだということであり、それは政治リーダーである歴代総理の責任であり、直接的には歴代の「高齢社会対策担当大臣」の無策連鎖の結果であることに疑いの余地はありません。

責任ある政治リーダーとしては、一九九九年「国際高齢者年」の四月に都知事になった石原慎太郎氏もそのひとり。石原さんは一〇月一日の「国際高齢者デー」の東京での記念式典で、高齢者に期待する「あいさつ」をしているのですから。「高齢社会」形成への時期に、政治リーダーとして、七〇歳代の小泉さんと八〇歳代の石原さんは「歴史的役割」を果たした政治家に名を連ねてほしいのです。

一九九六年以後、毎年の『高齢社会白書』の公刊を「高齢社会対策担当大臣」として担当してきた大臣はみなさん直接の責任者です。そして今その責任はいうまでもなく「一億総活躍担当大臣」にまで連なっているのです。

いまさら問うのとは思いますが、消費税論議の最中だった二〇一二年九月に一年ぶりに「高齢社会対策大綱」が閣議決定（野田内閣）して改定されましたが、財源である「消費税」とともに実態にかかわる「大綱」改定に関心をもつ国会議員はほとんどいませんでした。

「改定大綱」の重要な提案は「人生六五年」から「人生九〇年」への意識の醸成を求めていること。と同時に、就労、健康づくり、社会参加、学習活動、生活環境、市場

の活性化、全世代の参画といった各課題への「支え手の高齢者」の参加を呼びかけていることにあります。

二〇年の対策の延滞を取り戻した上での「日本高齢社会」の創出は、今ならぎりぎり間に合うのです。高齢者が四人にひとりになった段階からの事例としての「日本高齢社会」達成への道は、閉ざされてはいません。本稿はここに新世紀二〇年の経緯をつぶさに検証してきた立場からの救済案を示そうとしているのです。

### 「大綱」の改定を知らない高齢者

「高齢化」社会への国の対策の指針となる「大綱」は五年刻みに見直されて、その改定が二〇一二年九月に野田佳彦内閣でおこなわれましたが、高齢者のみなさんはご自分の人生にかかわる重要な改定の内容なのに、おそらく知ら（され）なかったといっ  
ていいでしょう。

二〇一二年改定の「大綱」にはなすべき事業として、「人生六五年」から「人生九〇年」への意識の醸成が取り上げられています。「六五年」から「九〇年」へと一足飛びに二五年の高齢者意識の延伸を求めていることから知られるように、年々の事業を渋滞させたままつづいてきているのです。

安倍内閣の「高齢化」政策の不在はすでに指摘したとおりです。みなさんもお気づ

きのように、安倍総理は女性と若者の「成長力」に期待して、ことあるごとに参加を呼びかけていますが、「成熟力＋円熟力」を持つ高齢者の参加には言及がありません。新世紀歴代の政治リーダーは「高齢者」はすべて「支えが必要な人」という固定観念を持っており、「社会参加」に意欲と能力のある人びとに「支え手」に回ってくれるよう訴えることがありませんでした。

「コンクリートとからひとへ」と訴えた民主党の政権下でも変わりがありませんでした。あの大地震があった二〇一一年の一〇月に、民主党政権の野田佳彦内閣で高齢社会対策担当の蓮舫大臣（蓮舫議員が「少子化」と併任の「高齢社会対策担当大臣」だったことを、どれほどの人が知っていたでしょうか）のもとで、有識者検討会（座長清家篤慶応義塾大学長）を立ち上げて報告書を作成、その後、内閣官僚の検討を経て、二〇一二年九月七日（このときは中川正春担当大臣）に閣議決定をしました。二〇一一年の小泉純一郎内閣以来の一一年ぶりの「対策大綱」見直しでした。

一一年ぶりに内閣府で「対策大綱」の改定を検討しているというのに、衆参両院議員は、日々まことに熱心に「社会保障」費の財源となる「消費税増税」というおカネのほうの議論をしており、肝心の高齢社会の具体的なありようについては、ほとんどないといっているほど関心が薄かったのです。

ですからマスコミ報道も閣議決定のその日かぎり、内容については多くの国民の



知るところとなりませんでした。無理もないことですが、若い厚労省クラブの現役記者は、「高齢社会対策」については「認知症」ほどには肝心な問題として認知していません。

\*内閣府に専任の担当大臣を

わが国の「高齢社会対策」の遅延がなぜ起きて、その責任の所在がどこかに触れられません。

直接の責任者であった「高齢社会対策」の担当大臣を見てみます。

毎年出されている『高齢社会白書』（内閣府刊行）の閣議への提出者を見ると、平成二一年度版は小淵優子大臣が、二二年度版は福島みずほ大臣が、そして二三年度版は蓮舫大臣が、二四年度版は小宮山洋子大臣が、二五年・二六年度版は森まさこ大臣が、二七年度版は有村治子大臣が閣議決定時での担当大臣となっています。

連ねてみると明らかに「少子化・高齢化」を合わせて担当する人選であり併任であり、それも「少子化対策」の方が主であることが知られます。民主党政権時代だけ九人の担当大臣（少子化も同じ）がいました。そのことを議員どころか閣僚どころか本人すら経緯を知らなかったのではないか、と思われるほど無責任なのです。

参考までですが、民主党政権の九人というのは、福島みずほ、平野博文、荒井聡、

岡崎トミ子、村田蓮舫、細野豪志、村田蓮舫（再）、岡田克也、中川正春各議員です。中川議員が「高齢社会対策大綱」改定時の担当大臣でした。

岡田副総理は、併任で少時とはいえ担当となったとき、その重要性を知り得ていれば、おそらくそれ相応の対策をとったことでしょう。改定した「高齢社会対策大綱」を閣議決定した野田総理でさえ内容の理解まで根がとどいていなかったのです。高齢者の活動が社会にもたらす有意な影響には触れていますが、それが高齢者自身の実人生を活発にして新しい社会の形成に向かう力になることには触れていないのです。当時五五歳の総理には高齢者の実人生には理解が及ばなかったようです。

民主党にとってのチャンスでした。呼びかけがあつて、六〇歳に達していた「平和団塊」のみなさんが自らの「高齢化」への将来展望を課題にし、議論し、対策を打つことができているならば、今のようない〇%台の支持しかえられない党の姿を露呈することはなかったことでしょう。世代交代ではない世代交流での経緯を訴えていた本稿には見えていたことでした。

担当大臣として実現できるしごとも少なく、予算も少なくなり、組閣時に「高齢社会対策担当大臣」として辞令も出なくなってしまうために、恒例の組閣後の記者会見でも関連する質問が生まれません。「日本高齢社会」の形成は国際的にも歴史的にも大事業のはずなのに、今世紀にはいつてからの歴代担当大臣はその重要性を認知しないま

まできているのです。

内閣府内部の扱いも「共生社会政策」の一分野として、内閣府政策統括官（共生社会政策担当）が担当しています。「高齢社会対策担当」の参事官や政策調査員がいるにはいますが、併任だったりしますから、「高齢社会対策」を担う太い導線が内閣府内に整っているとはいえません。内閣府内の主要な職務として扱われなくなってしまうて久しいのです。

「高齢化を一過性のものとし、少子化を恒常的なものとする」

という施策は、この国の将来を二重に誤ることになるのです。

遅れを取り戻すには、まずは内閣府内に担当大臣を据えて、「高齢社会対策」を担当する太い導線を形成して、高齢社会推進のしごとを総括して進めねばならないでしょう。世紀を通じた国際評価につながる「高齢社会対策」を重視すべきときなのにもかかわらず、国会議員はなおその重要性に気づこうとしないのです。全国津々浦々から三五〇〇万人の高齢者が、

「高齢社会対策の専任大臣と強力な部局を！」

と叫んで、国会周辺の銀杏並木を揺さぶる必要があるのです。世界の高齢者が期待する「日本高齢社会」形成への新たな烽火を掲げるべき時であり、時は切迫しているのです。

こども庁とともに高齢者庁をとというのは、以上のような緊急性をもっているからなのです。

### Ⅲ 広がった亀裂と格差

#### 「九割中流」から「下流老人」へ酸欠流下

新世紀の「二〇年」は、九割中流をなしとげて高齢者になった功労者が、「下流老人」と呼ばれて「老後破産」という境遇に陥るには十分の長さだったようです。

個人の努力では隠しおおせなくなつて、「失われた二〇年」の実例として露呈してしまつたのが、「老後破産」や「下流老人」の存在です。

それも政治の側からではなく、実例として知つた現役世代の若い報道人の側の将来に対する不安を契機にしたリポートが話題として広がつたからでした。

二〇年前に先人がめざした「長寿をすべての国民が喜びの中で迎え、高齢者が安心して暮らすことのできる社会」（基本法前文）がむなしく聞こえます。喜びと安心はどこへ消え去ってしまったのでしょうか。

「老後破産」のリポートは、NHKスペシャル取材班による『老後破産』（新潮社）であり、サブタイトルが「長寿という悪夢」です。

この「基本法」の理念を逆なでするようなキャッチコピーが、腫物にさわるような

痛みを伴って問題提起となったことで、売れなかった高齢者本にウリが立ちました。みなさんもTV番組で見た人は、自分はそうなりたくないと思いつながらこの本も読んでほしい、そういう高齢者をまわりで見つけているでしょう。将来あつてはならないものを見てしまった現役世代の驚愕のレポートなのです。

「ひとり暮らしの高齢者」に何かが起きている。その経緯はわからないが現場からしか議論は始まらないと決めて、NHKスペシャル取材班は現場にはいったのでした。

取材の切り口は「経済的困窮」です。

「老後破産」とはどういう境遇の高齢者をいうのかというと、

ひとり暮らしの高齢者で、収入が生活保護水準（月約一三万円）を下回っていても生活保護を受けていない（受けられない、受けようとしぬ）人で、預貯金の蓄えがないか乏しく、年金（国民年金六万五〇〇〇円＋）だけでギリギリの生活をつづけている人。だから病気になったり介護が必要になったりすると、とたんに生活が破綻してしまふ――

こういう境遇の高齢者を対象にし、番組（NHKスペシャル）のプロデューサーが「老後破産」と呼ぶことにしたといいます。ざっと二〇〇万人余がおり、増えつづけているという。「長寿という悪夢」のサブタイトルには、生きつづけることで追い詰められていく（「預金ゼロ」へのカウントダウンも）現実の苦しさ、厳しさ、虚しさが込

められています。これでは長寿の日々が楽しいはずがないのではないか。それが取材の前提でした。

NHK取材班は、さまざまな問題をかかえて「老後破産」寸前にいる高齢者を対象に選んで、個人の喜怒哀楽の声を聞いていきます。

必死で働いてきたのに報われない老後――

だれもが口にするこのつぶやきは、二〇〇万人にとどまるものではないでしょう。都営団地に住む菊池幸子（仮名）さんは、その典型のような暮らしをしています。

菊池さんは八〇代で、八年前にまだ独身だった四〇代のひとり息子を失った。そして三年前には夫をガンで失って、ひとり暮らしになった。夫の生前はふたりで一三万円ほどの年金で暮らしていたのですが、その後は毎月八万円（国民年金六万五〇〇円＋）に。専業主婦だったから厚生年金はない。経費は家賃（一万円）、介護サービス（三万円、要介護二）、生活費（公共料金を含む、七万円）で、毎月必ず出る三万円ほどの赤字を預金（残り四〇万円になった）を取り崩して充てており、「老後破産」へのカウントダウンがつづいています。

菊池さんにしてもそうですが、「多くの高齢者はその権利（生活保護）を行使しようとしなさい」と取材者は感じ取っています。「贅沢は敵」とばかりに消費を切り詰め、耐え忍んでいる。生活保護を受けることは「国の御世話になること」であり、罪悪感を

伴うと訴える声も多い――

と実情を報告しています。

菊池さんの夫は工務店の主人として、働く人たちが豊かになることに配慮し、自らの老後のための預金を積むことなど考えていなかったでしょう。

そういう「みんなが等しく豊かに」を貫いてきた人びとの人生を、最後まで保てるような「高齢社会対策」を講じないできて、「生活保護」という配慮の浅い「社会保障」で対応する政府も自治体も信用されていけないのです。

戦争と戦禍を経験し一日でも長く生きることの命の尊さを知る人びと。その願いを閉ざして、「こんな世の中を見てもう長く生きたくない」

と吐露せざるをえないような環境に置かれているのです。

一生懸命に働き、一生懸命に生きてきた普通の人たちが報われない、それが今の日本の老後の現実なのだ――

そういうところに取材班の結論は行き着かざるをえないのです。

こういう社会を二〇年で呼び寄せてしまった責任はだれにあるのか。その責任はきわめて重い。

\*無策連鎖が「下流老人」を生む

一方、『下流老人』（朝日新聞出版）という本のタイトルは、筆者の造語だといいます。市で一二年間、生活困窮者の支援をしてきた三〇代の筆者は、NPOの運営者（ソーシャルワーカー）であり、年間三〇〇人ほどの生活困窮者からの相談を受けている。そのなかで多くの高齢者の困窮した惨状をみてきました。

「下流老人」というのは、「生活保護基準相当で暮らす高齢者およびその恐れがある高齢者」と定義していますが、実感の裏打ちがある造語です。いいかえれば、国が定める「健康で文化的な最低限度の生活を送ることが困難な高齢者」です。

そして三つの「ない」が指標とされることになります。

収入が著しく少ない。十分な貯蓄がない。頼れる人間がいない。

つまりあらゆるセーフティネットを失った状態をいいます。

上記の『老後破産』と同様の趣意で同じころに発刊されましたが、両書ともベストセラーになりました。上記書と違うところは、「介護離職」などで子ども世代が共倒れすることや、少子化を加速させる（子どもがいなければ十数年間は下流にならずにすむ）といった次の世代への影響を指摘しているところにあります。

「自分がこんな状態になるなんて思いもしなかった」

とつぶやくのを、筆者は相談にきた高齢者から異口同音に聞いています。

老後の貧困は想定外の事態であり、立ち至った事由はもともと貯蓄がなかったり、



思いのほか年金が少なかったり、親の介護で職を辞めたり、同居の子どもが病気（うつ病）だったり、自分が大病をしたり、といういろいろな事由は個人的にみえますが、社会のしくみの問題であり、全世代にかかわる問題であるとして論じています。「下流老人」は、姿を見せないようにして隠れているといえます。

そしてとくに一定の年代より上の人は「オカミの世話になりたくない」という意識が根強くあると指摘します。「オカミの世話」を大正期から戦前生まれの人は期待していないのです。

戦争を起こし、自由を奪い、若者の命を奪い、戦禍の苦しみをもたらしたからです。戦後もとくに「オカミの世話」を受けずにみんなして働いて豊かになった。「一定の年代より下の人」は不安な将来の老後のために貯蓄することで守ろうとします。

筆者は、現実の声を聞き、さまざまなケースを統計類を駆使して一般化し社会化することで、読者の納得を与えることに苦心しています。「一億総中流」社会がそのまま放置したままだと、いずれ「一億総下流」の時代がやってくると、危機感をもって受け止めています。

察するところ、先輩はいま文なしの「下流老人」のひとりとして細々と暮らしているにちがいない。後輩として藤谷さんは、赤字まではともかくゼロに始まってゼロに終わる人生を納得する覚悟ぐらいはしてきたし、将来が不安で自分と子どもたちのた

めに貯蓄をしたという「純正団塊」や「ぶらさがり団塊」の考え方とは違うように感じています。

戦後にみんなで等しく豊かになろうと行って自分のためには貯蓄といえるほどの貯蓄をしなかった多くの先人が思われます。

「いま貯蓄がなくて暮らしが貧しいからといって、九割中流の社会をつくった功勞者の高齢者に対して、『下流老人』呼ばわりするとはなんということですか」

藤谷さんはこらえきれずに声を強めて素晴らしいです。

#### 現代「韃陀多(カンダタ)」の話

「カンダタって知ってるよね」

と若い人に聞いたたら、きつと「ドラゴンクエストの悪役キャラでしょ」と応じるでしょう。

「その元ネタになった芥川龍之介の『蜘蛛の糸』の韃陀多(カンダタ)なんだが」

といい添えれば、細い記憶の糸をたどって、かつて国語の教科書で読んだ芥川龍之介の『蜘蛛の糸』の主人公を思い出してくれるでしょう。

大正七年(一九一八年)の作品というから一世紀ほど前のことになりましたが、芥川龍之介が子ども向けの雑誌『赤い鳥』の創刊号に書いた童話の主人公のことです。

お釈迦さまが出てくる話ですから一〇〇年なんか先月みたいなものですが、芥川はお釈迦さまがおいになる極楽とその対極である地獄との間で、一筋の蜘蛛の糸にすがっている犍陀多を主人公にする童話を書いたのです。

もちろん天上が極楽ですから、蜘蛛の糸は極楽から地獄へと垂れてきたもので、犍陀多はその糸にすがって地獄から極楽へと救われる途中にいます。

本人は覚えていないのですが、悪党だった犍陀多がかつて一匹の蜘蛛を踏みつぶさずに助けてやったことがあって、そのことからお釈迦さまは仏界から一本の蜘蛛の糸を下ろして、地獄であえいでいた犍陀多を救ってやろうとなされたのです。

上へいけば極楽へたどりつき、落ちればまた地獄という中間で、犍陀多が下をみると、蜘蛛の糸にすがって蟻のように後から後から罪びとたちが昇ってきます。

極楽へつながるのは一筋の細い蜘蛛の糸。そんなにたくさんの人々の重さに耐えられずに糸は切れてしまうにちがいありません。

とつさに「自分だけはなんとか」と考えた犍陀多は、「下りろ、下りろ」とわめいたのです。

と、そのときに糸は切れて、犍陀多は地獄へ落ちていきました。悪党だった犍陀多なのですから、とつさに自分の下で糸を切ることくらい思いついたとしても不思議ではないのですが、作家は犍陀多にそんなことをさせるいとまを与えずに、犍陀多の上

で糸を切ったのです。

じつは芥川のこの『蜘蛛の糸』の話には元ネタがあつて、鈴木大拙が訳したポール・ケーラス著『カルマ（因果の小車）』から得ているのです。やはり仏陀に「この糸を借りて昇り来たれ」といわれて、犍陀多は極楽へむかいます。が、同じように後から後から糸にすがつて昇ってくる人びとに気づいて、「去れ去れ、この糸はわがものなり」と絶叫するところで糸が切れて、地獄へ落ちていきます。

同じ地獄へ落ちていく犍陀多を見る鈴木大拙と芥川龍之介とが感じていたところは同じではないでしょう。それを論じることもできるのですが、ここでは芥川のほうのモチーフに限って追つてみたいのです。それは芥川が原典にはない極楽の蓮の池の傍らを歩いているお釈迦さまを登場させて、犍陀多のようすを書いていることにも見えています。大拙はそんなことをしないし、できません。大拙が関心を持つのは凡夫としての犍陀多の心の動きだからです。

芥川が「極楽と地獄」という対極を明確に示したのは、おそらくは当時、鋭敏な作家の眼の前で広がりつつあった「格差」を表現したかったからにちがいないからです。

そんなことに気づくこともなく、当時もその後も「蜘蛛の糸」を読んだ子どもたちは、率直に単純に「自分だけはなんとか」と考えてはいけなさんだと思ふことで大拙ふうな作品のモチーフに納得していたにちがいません。が、複雑な人生を歩んで

いるおとなたちの中には、これを読んでそうは思わなかった人もいたでしょう。

衣と食と住には安心できても、芥川が表現するように極楽は日々を過ごすには単調でつまらなそうに思えたということ。極楽にいつても自分を理解してくれるような仲間はいない。それなら地獄から極楽までたどる途中に他に何か別の世界があるはずで、そこで下からくる連中に糸をくれてやって塗中下車してもいいと思ったことでしょう。

糸にすぎる俗世の凡夫のひとりとしては、「自分だけは」という韃陀多の心の動きを素直に納得して、極楽ゆきはあきらめて、自分もまた地獄に落ちてもしかたがないと思ったことでしょう。それでも当時、ご葬儀などのお経のあとの説法で、仏弟子の目犍連（もくけんれん）が餓鬼界にいる母親を助けにいった話などを聞かされていたとしたら、どこかで途中下車ができるはずと思っても悪党とはいえないでしょう。

\*また大震災に遭遇して

その後の大正一二（一九二三）年に起こった関東大震災は「天災」による地獄でした。家族をちりぢりにし、人の命と住居を奪った天災。

芥川が育った川向こうの本所地域は火の海になりました。いま震災記念堂が残っています。

芥川にその後起こった「人禍」である日中戦争・太平洋戦争がどこまで予見されていたかは知れませんが、大震災に遭遇した後、「唯ぼんやりした不安」に襲われて昭和二（一九二七）年には自死します。将来の自分が生ききれない時代の人生を予見していたことは確かです。

「天災」である関東大震災と作家芥川を襲った「唯ぼんやりした不安」、そのあと引き起こした日中戦争から太平洋戦争の「一億総動員」の一四年戦争。

いま「3・11」東日本大震災のあと、世に「格差」が広がるなかで「外敵」が喧伝されて、「不安」に襲われている多くの国民。信頼からほど遠い政治状況。一〇〇年をすごしてまた「平和と平等」指向から「戦争と格差」を容認する性向が国民を圧迫しつつあるのが現実です。

歴史は繰り返して起きるといのが「史不絶書」です。歴史を知らない者によって繰り返されるので、前もって記すことがむずかしいけれども必ず繰り返して起きる。

繰り返すとすれば、次にやってくるのは、かつて昭和初期の歴史に記されている国粹化と軍国化。仮想敵国をつくって「軍隊」に国民の関心を誘導する政治家が支持を受けることになります。少数意見をかき消す大応援はすでにプロ野球やサッカーやライブ演奏の会場で培っています。だれにも止められないその波動がやってきて、戦禍を知らない若い人が心の中の平和を護るために外に軍隊を要請します。おりしも戦後

の平和を七〇年外に向かって祈りつづけた明仁天皇の生前退位とともに終わる心の戦禍と民族的鎮魂の時代、そして始まる不確実な時代。

「自分だけは何んとか」と願いながら、極楽へゆくことができずに自分も地獄に落ちていくのを察知している現代の犍陀多。それでも自分の蜘蛛の糸が遅くにきれるようにと祈って。

胸中に戦禍を収めて外界の平和を祈った大正人、胸中の平和を守るために外界に「軍隊」を要請する平成人。「戦争と平和」という存在の多重性の間を行き来する振り子のような昭和人。いま「平和から戦争へ」「平等から格差へ」と時代の振り子が振れる気配。

「九〇年人生」という長い高年期を得ても、将来への「不安」を抱えて過ごさねばならないというのは酷な話。そのなかで「自分だけはなんとか」という思いで暮らすというのも罪な話。

酷でもなく罪でもない穏当な人生にならないものか。

近年になって「平和と平等」から際立ってきた「戦争と格差」への転回による地割れ。

「非を飾る」若者たちと「関わらない」安保世代

高齢者と若者のあいだの亀裂について。とくに先端的な若者たちと活動的な高齢者の間の亀裂で見てみましょう。

七七歳を迎えた上田さんは「喜寿」を喜べません。

喜べない理由はふたつ。

世相として世の中が高齢であることに関心を持たなくなったこと、そしてとくに若者たちがオモシロくない大人の話、アドリブのできない会話に耳を傾けなくなったこと。高齢者が笑いがとれるバカ話ができないのが理由です。

上田さんは先端的な若者の言動はワル乗りを越えていまや「非を飾る」域にあるといえます。

「？ 非を飾る」とはどういうものをいうのですか。

「際立っている例ですけれど」

と前置きをしながら、上田さんは四つの若者のことばを並べます。

「なまぬるい幸せなんか押しつけないでほしい。不幸な体験だっしてみたい」

「戦争の現場に出るなんて実感は人生の極みじゃないか」

「善意なんて何も生まない。悪意が行動のエネルギー源なんだ」

「毎日遊んでいるくせして、うるさいじいさんばあさんはいらぬ。遺産を残して早く死ね」



一回きりの人生だから不幸な体験もしてみたいという若者に幸せであることを願うことはできない。戦争を避けて平和を望むことも、善意から話すことも、そして先人として安心して存在することすらできない。

いつの世も若者の変革への「知」は時代を先回りして待つ。それはそれでいい。そして自分の耳に逆らうような「諫めをふせぐ」ために知性が使われる。人間だれもが隠し持つ負の本性が露わになって、前の時代の意思を閉ざして時代は転移するものなのか。

上田さんはそう考えるようになって楽しめないというのです。

直接にそういわれれば、若者は「そんなこと、マジにいうはずないじゃんか」と笑い飛ばすでしょうが。

\*「もう関わらない」安保世代

少年の日に自分が蒙った戦争中の惨禍や戦後の混乱。それを繰り返し返してほしくない不幸な体験として若い人に伝えること。上田さんはそれが無益であると思うようになったといいます。

「もう金輪際、わたしは関わりませんけれど」

上田さん。ちょっと待ってください。

たしかに上田さんがいうように、このところ高齢者は軽視・無視ときには蔑視までされていて、実人生でも「アベノミクス効果」から何の恩恵を受けていませんし。

しかし上田さん、四人にひとりの高齢者の保持する知識・技術・資産などの潜在力が残されています。これを発揮してつくる「成熟+円熟社会」は、新次元の事業にはなりませんか？

「・・・一〇年は遅いような気がします。出かけていく意味を感じなくなりました」  
まっ白くなり、薄くなった髪を撫であげながら、上田さんはそういいます。

先ごろ「安保法制」反対で国会前までゆき、六〇年安保世代として若い母親たちと語り合ってきた上田さんのような人呼び戻す方策を、本稿の中で練り上げられるかどうか。

### IT化と「デジタル・デバイド」

どこと違って電車の中ほどIT現場として表層をみるのに適したところはないでしょう。込み合った電車で運よく座席に座れた客は、座るなり手持ちのIT機器を取り出します。記憶にある車中の情景。文庫本を取り出して読み始める姿と重なります。いまでは多くて本派は数人で、あとはデジタル機器です。内容まではわかりませんが、音情報もふくめてなんでもありといった多彩さなのです。

もうひとつの潮流は高齢者が人口の四人にひとりまで達してさらにふえつづける日常生活圏の変容です。

あわせて問題を指摘しますと、高齢者が増えて高齢者社会になりましたが、モノの変容が高齢者が暮らしやすい高齢化社会になっていないということなのです。生活感性の水準の高い日本の高齢者が途上国の人びとに合わせた日用品に囲まれて暮らしているということなのです。高齢先行国として自国の社会の変容に合わせたモノやしくみの高齢化を求める静かな潮流です。この詩魚潮流としての課題に答えるのは、団塊世代の中の機械工学に詳しい人たちで、高齢者向きのAIを開発してくれていれば、「デジタル・デバイス」は起きないで済んだところなのです。

高齢者についていわれる「デジタル・デバイス」(情報格差)は、IT機器のイノベーション(技術革新)が時流の若い世代の対応力を主とする新製品化によって生じています。同時に配慮されるべき潮流の「高齢者」対応のイノベーションがなされないために生じているのです。

ですからパソコンとケイタイ(ここでも熾烈な製品競争)を駆使する若い孫娘はいつか、

「わたしが主演！」

として振る舞うようになり、「世の中ますます粗悪になる」とグチりつづけて新しい

ことができない祖父を脇役とみるようになりました。

企業が国際競争に勝ち抜くためには激しい時流への対応が優先するのはしかたがないし、それを受け入れる国内の優れた若い購買層も必要です。

「グローバル化」は身近なところでは、企業内の「非正規社員の増加」となって実感されています。わが国よりひと足ふた足遅れて成長期にはいったアジア途上諸国と付き合うための「日本途上国化」はいたしかたない現象です。「日本途上国化」のほうは、わが国の高齢者はこれはいつか来た道として、アジアの民衆がわが国と同じようなモノの豊かさを共有するまでの時流として対応しているのだと、これはみなさんも納得していることでしょう。

#### \*スマホ娘に教えを乞う

新世紀に「先進国型の高齢化」を迎えるはずが、「途上国型の若年化」に出くわしたのですから、日本の高齢者層は二重の災難に見舞われることになりました。

前世紀末にはじまった超大国アメリカと途上諸国が中心の経済が「グローバルゼーション」(地球規模化)と呼ばれているのですが、ソビエト社会主義圏の崩壊後の超大国アメリカ市場への途上国参入が日本経済をきしませながら新世紀へと舞台は回ったのでした。そして「BRICS」(ブラジル・ロシア・インド・中国、南アフリカ)を

はじめとする途上諸国の台頭と追いあげという時流にさらされることとなりました。ドイツでは東西統合の難題をかかえ、EU諸国はそれぞれに地域内の混乱の收拾に手間どったのは異なりましたが、わが国もバブル崩壊後のゼロ成長経済と政界の離合集散の混乱のなかで世紀を越えました。

その対応に覆われてしまったために、もう一方の国際的潮流である「高齢化」は波がしらさえ見えなくなってしまうています。見えないけれども新世紀の国際的課題として底流しており、日本の対応は先行国として各国に注目されているのです。にもかかわらずここまで述べてきたように、政府の「高齢社会対策」の遅延が二〇年つづいており、対策を講じないうちにさまざまな難題を引き受けざるをえなくなっているのです。

ほんとうは高齢者も新世紀の日本社会で、若者・女性とともにシルバーのようによく、プラチナのように不変に輝いている時期を迎えているはずだったので、そうならないのが実情です。シルバーやプラチナどころか、スマホ娘には粗大ごみほどの扱いさえ受けたりしています。そこでスマホ娘に「下問に恥じず」（不恥下問）に徹して教えを受けて、家庭内での難題を克服して、高齢期人生の質的な「尊厳」の確保に努めることになります。